様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０４２５

研究課題名（和文）『万葉集』の特殊性と普遍性　翻訳の実践および理論を通して

研究課題名（英文）Particularity and universality of the poetic expression in the Man'yoshu - From the point of view of practices and theories of translation

研究代表者
Ｊｕｌｉｅ　ＢＲＯＣＫ（Brock, Julie）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：７０２９３９８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：万葉詩人の表現の独自性がどのようなものであるかという問いに対し、翻訳の実践と理論を通して答を導いた。一方では、例えば、和歌に含まれる掛詞の二重の意味をどのように掴み、別の言語で伝えることができるかについて考察した。また、枕詞については、日本で評価を得ている注釈書をいくつか検討し、広い知識をもとに意味合いを導き出し、別の文化においてそれに対応する表現を見出した。他方では、例えば、翻訳学学者メショニックの理論を基に、彼の言う「主体」「リズム」などの概念をどのように『万葉集』の和歌に当てはめられるかを問い、万葉詩人の技法を通して、当時の人々の世界観、時間の感覚などの「文明的な」要素を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examine the particularities of poetic expression in the Man'yoshu from the point of view of the practices and theories of translation. On one hand, we wonder for example about the double meaning of "kake-kotoba" and the way in which this meaning can be transmitted in another language. Or, as regards "makura-kotoba", we refer to the japanese most authorized comments on the Man'yoshu in order to broaden the knowledge that will enable us to search a corresponding representation in the other culture. On the other hand, we refer for example to the works of the french translator and translation theoricist Henri Meschonnic, and try to clarify if his concepts of "poetic subject" or "rhythm" can find any resonance in the Man'yo's poetry. From this point of view, our study leads us to question the worldview of the poets of the Man'yo, and to think about the possibilities of correspondences in the anthropological and civilizational point of view.

研究分野：日本古典文学、翻訳学、美学、比較文学

キーワード：万葉集　掛詞　枕詞　メショニック　主体　リズム　恋の歌　翻訳学

１．研究開始当初の背景
本研究の背景には次のような問いがあった。なぜある文学作品は長きにわたり成功をおさめるのか。なぜある詩が傑作と評価されるのか。また、なぜそれが今日なおそのようなものとして読者の心を打つのか。こうした問題について考察するために、『万葉集』を対象とし、翻訳学の観点から、その恋の歌を吟味することにした。

２．研究の目的
万葉における恋の表現（「直に会う」「手枕をまく」「紐解き開ける」など）をどのように外国語（例えばフランス語）で伝えることができるか、という問いを立てることによって、次の二つのことが明らかになる。一つは、表現の面において、和歌における日本的で極めて特殊な要素。もう一つは、内容の面において、人間である読者誰でもが理解できるように思われる普遍的な要素。これまでの人文科学にはなかったこの新しい課題の意義は、そこにあると考えた。

３．研究の方法
日本の万葉詩人の表現のありようや、その独自性がどのようなものであるかという問いに対して、翻訳の実践と理論を通して答を導いた。実践の方では、例えば、和歌に掛詞や同音異義語が含まれる場合、その二重の意味をどのように掴み、別の言語で伝えることができるかについて考察した。また、枕詞が現れる和歌については、日本で評価を得ている注釈書をいくつか検討して、広い知識をもとに意味合いを導き出し、別の文化においてそれに対応する表現、イメージなどを見出した。理論の方では、例えば、アンリ・メショニックという翻訳学学者の理論をもとに、彼の言う「主体」「リズム」などの概念をどのように『万葉集』の和歌に当てはめられるかという問いを立て、万葉時代の詩人たちの技法などを通して、当時の人々の世界観、時間の感覚などの「文明的な」要素を明らかにした。

４．研究成果
　研究成果を三部に分けて以下に挙げるが、各部は各年次の研究内容に相当する。

１）実験的な観点
一年目は、『万葉集』の歌の構造は複数の読解の可能性を生じさせるようなものであることを示した上で、この原詩の複合性を伝えうる訳詩こそが「忠実な」翻訳であることを示した。

１－１：「『万葉集』における恋の祈り―「乞ふ」と「恋ふ」の掛詞を翻訳する」
第3巻380番歌を取り上げ、歌人は神に祈りを捧げながら、同時に恋人にその恋を打ち明けること、その歌は身体の欲望と心魂の願望とのあいだの結びつきを生むものであることを示した。

１－２：「『万葉集』における「孤悲」の表現についての考察―フランス語訳の試みを通して」
第9巻1778番歌を扱い、「孤悲」という表記によって表現される「こひ（恋）」の意味を問題とした。この語は言語学的には恋の苦しみを示すに違いないが、人間学の観点からは逆に、恋人を待つ喜びや確かな期待の感情を示すものでもあることを明らかにした。

１－３：「秋風と露の涙―『万葉集』の一首に関する風土的な考察」
第8巻1617番歌を例として、景物と心象の関係を明らかにし、和歌の構造をどのようにフランス語訳で伝えることができるかについて論じた。

２）理論的な観点
二年目は、同じく翻訳学の観点から、詩の分析を通して翻訳における諸々の困難を挙げ、それに基づいて、とりわけ意味論と修辞学の観点から、翻訳という行為の理論化を試みる。

２－１：「『萬葉集』における恋の表現について―翻訳を試みて」
第10巻1921番歌と1925番歌において、「孤悲」を改めて考察した。孤独と悲しみの意味を含むこの語に喜びのニュアンスも見出されることを示した上で、それをフランス語訳において伝えるためには、どのような工夫が必要であるかを説明した。

２－２：「和歌の表現の巧みさをどのように翻訳するか―『万葉集』の一首の和歌における同音異義語のはたらきを例に」
　ディドロは『盲人書簡』の中で、ある盲人が、精神の前にある様々な客体を極めて「巧みな」やり方で描写する能力を持っていると言う。ディドロによれば、日常言語の言葉は、客体へ直接導かれる光を生みだし、それを全ての人が共有する現実に一番共通した面で現出させる。他方、「巧みな表現」とは、こうした客体に補足的な光を投げかけるものであり、その光は初めの客体の上に間接的にもうひとつの客体を映しだす。すなわちそれは、比喩の光である。このような「二重化した光」というディドロ的イメージを第11巻2382番歌に当てはめ、二つの異なる意味を含む言葉によって描き

出される、現実と想像の二つの世界を明るみに出した。この二つの光が結ばれるところに新たな世界、つまり本来の意味で詩的な世界の次元が生みだされることを示した。

２－３：「『万葉集』の歌三首から「おほほしく」をどう解釈し、フランス語に翻訳するか」
おぼろげな景色やあいまいな知覚を喚起する「おほほしく」という語は、曇っていると同時に透き通ったヴェールの役割を果し、恋の出来事を隠すと同時に現わすものであることを示した。このヴェールの機能から、恋というものが目に見えないものでありながら、感覚を通して感じられるものであることを明らかにした。

２－４：「詩の「詩性」をどのように翻訳するか―アンリ・メショニックの『リズム論』をめぐって」
翻訳者に特異なことは、自らの言語において詩を「詩として」再び作り上げることである、という美学的観点に基づいて、アンリ・メショニックの述べる「主体」の概念について分析した。そのためには、「リズム」の概念から出発しなければならないが、メショニックの『翻訳の詩学』における「リズム」とは、伝統的な五七調などの韻律ではなく、ヘラクレイトスの言う「動き」の意味において、根本的な位置を占める概念である。つまり、ある思考が言葉を通して構成される「動き」を成すものがメショニックにおける「リズム」なのである。ここでは、『万葉集』の第 10 巻 1934 番歌を検討し、一方では、語彙、語法に重点を置く日本の注釈者による解釈が、伝統的な対立（意味と形、あるいはシニフィエ（所記）とシニフィアン（能記）など）に基づいていることを明らかにした。そして他方では、言葉の連続性に基づいて翻訳する試みが、詩に映されている世界に向けてのみならず、そこに映る「主体」に向けても新しい視野を開きうるということを示した。

３）比較文化論的な観点
三年目は、『万葉集』の和歌数首とその現代日本語訳（おもに折口信夫、小学館の翻訳者、中西進によるもの）を比較し、翻訳という行為にとって主観的なものが不可欠であることを示した。

３－１：「詩を詩として翻訳する―万葉集の一首の和歌をめぐって」
メショニックの言う「リズム」とは言葉の流れのことであり、この「言葉」には西洋語の「ディスクール」を対応させる。それは「話す人」（フンボルトの言う die sprechenden Menschen）の表現として定義され、その表現には、バンヴニストが言うように「私」と言う者の印が刻まれている。この現象をメショニックは「最高の主体化」と言い、言葉のリズムや音色や意味のまとまりを作るのはこの「主体化」である。第 9 巻 1778 番歌を対象として、この意味での「リズム」について吟味し、その「主体化」について論じた。

３－２：「詩の詩性をいかに翻訳するか―メショニックの「リズム」を通して見た『万葉集』の和歌」
メショニック、フンボルト、バンヴニストおよびボードレールの理論に基づき、詩に表現される「主体」は詩人の主体でもなく、読者の主体でもないということを示した。この「主体」が存在するとすれば、それは詩そのものの中に生きている「誰か」という「主体」である。このような「主体」を求めつつ、つまり、読者の心を今日なお動かすのは、詩の表現の中で何なのかという問いを立てつつ、第 10 巻 1934 番歌と第 9 巻 1778 番歌を分析した。結論として、この二つの歌に傑作としての新しい評価をもたらした。

３－３：「枕詞の詩学―三つの古代歌謡・和歌について」
主に賀茂真淵の『冠辞考』に基づいて、枕詞「あしひきの」「うちひさす」「しきたえの」に焦点を当て、具体例を吟味しつつ、枕詞の第一の働きは、詩の読者が一つの心になって和歌を読むように導くことであることを示した。また、賀茂真淵の研究の再評価を試みた。

３－４：「『万葉集』の和歌における「今」と「ここ」――瞬に凝縮された動きを翻訳する」
この発表では、和歌の時間性について考察した。その時間性は、詩人の表現の動きに沿い、音の響きと言葉のリズムにおいて捕らえられるものであり、それは和歌の中だけでなく、読者の記憶と心にも刻み込まれる。例を通して、それが没我の境地、自己を忘れた状態で詠む歌に組み込まれるということを示した。加藤周一の『日本文化における時間と空間』に基づき、『万葉集』の詩的感覚は、歌舞伎や能楽のように、永遠の瞬間を感じ取らせるということを示した。読者への作用は翻訳できないものであるとしても、翻訳者はこのような作用があるということを意識すべきであり、そうし

て初めて、千年以上継がれてきた『万葉集』の和歌の持つ力を西洋の読者にも感じさせようと試みることができると結論した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）
①ジュリー・ブロック、「恋の祈り―『万葉集』の和歌一首における「こふ」の二つの意味を翻訳する」、フランス翻訳学会(SoFT)誌、査読有、第 6 号『聖なるものを翻訳する』、2017 年

②ジュリー・ブロック、「着物の帯を結び、解く―恋の表現から見た萬葉歌三首の解釈と翻訳―」、万葉古代学研究年報、査読有、15 号、p. 175-183、2017 年 3 月

③ジュリー・ブロック、「春の日を愛でる言葉「菅の根」―『万葉集』における動詞「こひわたる」と助詞「を」の働きに関する一考察」、京都工芸繊維大学学術報告書、査読有、8 号、p. 1-14、2016 年 3 月

④ジュリー・ブロック、「秋風と露の涙―『万葉集』の一首に関する風土的な考察」、サイト「メゾロジック」
（http://ecoumene.blogspot.jp/2015/11/le-vent-dautomne-et-les-larmes-de-rosee.html）、査読有、p. 1-5、2015 年 11 月 25 日

⑤ジュリー・ブロック、「翻訳の重要な基準としての美学的観点―8 世紀和歌 2 首を現代語訳、フランス語訳と比較して」、『翻訳を通して何を伝えるべきか』、サイト「ヴォクス・ポエティカ」
（http://vox-poetica.com/sflgc/actes/traduction/6.1.%20Brock.pdf）、査読有、p. 250-256、2014 年

〔学会発表〕（計 11 件）
①ジュリー・ブロック、「『万葉集』の和歌における「今」と「ここ」―一瞬に凝縮された動きを翻訳する」、フランス翻訳学会(SoFT)「日仏翻訳学研究」第 2 回研究会、京都工芸繊維大学、京都、2017 年 3 月 3 日、4 日

②ジュリー・ブロック、「枕詞の詩学―三つの古代歌謡・和歌について」European Association for Japanese Studies、神戸大学、兵庫、2016 年 9 月 25 日

③ジュリー・ブロック、「詩の詩性をいかに翻訳するか―メショニックの「リズム」を通して見た『万葉集』の和歌」、日仏翻訳学夏期セミナー、パリ、2016 年 8 月

④ジュリー・ブロック、「詩を詩として翻訳する―万葉集の一首の和歌をめぐって」、Sciencescope、京都外国語大学、京都、2016 年 4 月 23 日

⑤ジュリー・ブロック、「詩の「詩性」をどのように翻訳するか―アンリ・メショニックの『リズム論』をめぐって」、フランス翻訳学会(SoFT)「日仏翻訳学研究」第 1 回研究会「日本古典文学の翻訳学」、京都工芸繊維大学、京都、2016 年 3 月 18 日

⑥ジュリー・ブロック、「『万葉集』の歌三首から「おほほしく」をどう解釈し、フランス語に翻訳するか」、万葉文化館第５回主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究―翻訳にあらわれる日本文学の特色について―」第８回共同研究会、万葉文化館、奈良、2015 年 11 月 7 日

⑦ジュリー・ブロック、「和歌の表現の巧みさをどのように翻訳するか―『万葉集』の一首の和歌における同音異義語のはたらきを例に」、平成 27 年度夏季全国大学国語国文学会大第 111 回大会、大東文化会館、東京、2015 年 6 月 7 日

⑧ジュリー・ブロック、「『萬葉集』における恋の表現について―翻訳を試みて」、平成 27 年度上代文学会大会、高岡市生涯学習センター、富山、2015 年 5 月 17 日

⑨ジュリー・ブロック、「秋風と露の涙―『万葉集』の一首に関する風土的な考察」、社会科学高等研究院（EPHESS）セミナー "Mésologie, Umweltlehre, fûdoron : racines épistémologiques et débats actuels"、パリ、2015 年 3 月 13 日

⑩ジュリー・ブロック、「『万葉集』における「孤悲」の表現についての考察―フランス語訳の試みを通して」、日本比較文学会第 50 回関西大会、広島大学、広島、2014 年 11 月 22 日

⑪ジュリー・ブロック、「『万葉集』における恋の祈り―「乞ふ」と「恋ふ」の掛詞を翻訳する」、アルトワ大学、アラス、2014 年 5 月 22 日

〔図書〕（計 1 件）
①ジュリー・ブロック、「和歌における枕詞の働き―『万葉集』の三つの和歌について」、マルク＝マチュー・ミュンシュ編『芸術のかたちと受容の質―「生の作用」について』、オノレ・シャンピョン出版、パリ、p. 171-189、2015 年 10 月

〔産業財産権〕

o出願状況（計 0 件）

o取得状況（計 0 件）

６．研究組織
(1)研究代表者
ジュリー・ブロック（Julie Brock）
京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授
　研究者番号：70293983

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし

(4)研究協力者
　なし